

「ヤマガラの子卵(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

4月上旬に営巣を始めた北軽井沢のヤマガラは、その後、新品の巣箱の中にせっせと巣草を運び続けた。



巣草を運び込み始めたのは4月8日である。例年4月下旬に巣造りを始めることが多いので、今年は非常に早いと言える。最初のうちは、運び込む巣草は「ミズゴケ」や「スギゴケ」が中心だった。



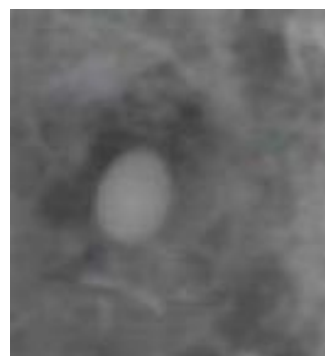
その後、巣箱内の一番奥(巣箱口から遠い位置)に窪み(産座)が形成された。更に数日後には、コケ類だけでなく、綿のようなものを持ち込まれるようになった。この綿のようなものは、卵やヒナを衝撃や寒気から守る為のものだろう。植物の綿毛のようなものや、獣毛、時には布団の綿のようなものまで運び込まれている。特に産座付近にはたくさんの綿状のものが敷き詰められている。



巣が完成した2日後の4月19日の早朝、ついに最初の産卵に至った。夜間留守にしていたヤマガラが、朝5時10分ぐらい戻り、30分ほど産座にすわったあと、また巣箱から出ていった。



親鳥が去ったあとには、最初の卵(初卵)が残っていた。シジュウカラの場合、産座周囲の巣草で、卵が見えないように丁寧に隠すことも多いが、このヤマガラは無頓着なようで「産みっぱなし」だった。



ヤマガラに限らずカラ類の場合、産卵が始まっても、親鳥が巣にいるのは産卵の時と夜間だけだ。昼は抱卵をしないのが普通である。昼も抱卵するのは、全部の卵(6~10個)を産み終わったあとである。これは最初のほうの卵と、最後のほうの卵で、抱卵期間をできるだけ揃え、ほぼ同時に孵化させる為である。シジュウカラの観察でも、初卵から終卵まで9日も差があっても、孵化は2日以内に終了している。